

中央大学工学部電気・電子工学科

同窓會々誌



(撮影 30年卒 大越氏「甘利山」にて)

1994—10

31号

中央大学校歌

石川道雄 作詞
坂本良隆 作曲

一、草のみどりに風薫る
丘に目映まばゆき白門を

慕い集へる若人が

真理まことの道にはげみつゝ

栄ある歴史を承け伝う

あゝあゝ中央、我等が中央

中央の名よ光あれ

二、よしや嵐は荒ぶとも

揺がぬ意気ぞいや昂く

春の驕奢おごりの花ならで

みのりの秋やめざすらむ

学びの園こそ豊かなれ

あゝあゝ中央、我等が中央

中央の名よ誉あれ

三、いざ起て友よ時は今

新しき世のあさぼらけ

胸に血潮の高鳴りや

湧く歌声も晴れやかに

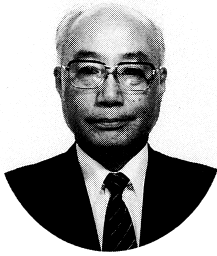
自由の天地ぞ展けゆく

あゝあゝ中央、我等が中央

中央の名よ栄あれ

目 次

中央大学校歌	2
会長あいさつ	会長 青木 義雄 4
新任に際して	教授 稲葉 次紀 5
定年を迎えての回想	安藤 敏雄 5
中大での生活を振り返って	深井 昌 6
社会人になって	平成6年卒 樋口 哲 7
“自分”と社会人	平成6年卒 神谷 絵美 8
「建設と電気」	平成6年卒 三浦 康文 9
企業に入社して.....	平成6年卒 井澤さおり 9
Man Machine Interfaca	昭和39年卒 藤森 勲 10
クラス会報告	昭和47年卒 飯塚 信市 11
我家を改築中	昭和47年卒 中嶋 隆一 12
会社員5年生のぼやき	昭和63年卒 伊藤 道弘 13
国境の町パウサウと海岸の町サンタバーバラ	
在外研究中の1年	情報工学科教授 築山 修治..... 14
学年幹事をお受けして	昭和35年卒 重政 弘康 17
平成4年度会計報告	18
「中央大学白門三三会」より	昭和33年卒 市川 友之 18
編集後記	19
平成6年度 総会懇親会のお知らせ	24



会長あいさつ

青木義雄

会員の皆様にはますますご健勝のことと存じ上げます。早いもので私が会長をおおせつかつてから2年になろうとしています。

この間、会則の改定に取組み、昨年10月30日の総会に於いて改定をみて施行されました。また一昨年からは学年幹事の皆様に会の事業を遂行していただいております。ご協力に感謝申し上げます。

本年3月24日に理工学部の卒業式がありました。電気・電子工学科の卒業生は233名でありました。これによりまして昭和28年3月卒業の第1期卒業生42名以来今日までの卒業生は7,319名になりました。また本年4月6日には入学式がありまして、新入生は189名でありました。

先生方では、本年3月をもって、安藤敏雄先生と深井昌先生が定年を迎えられました。両先生は実験室が水道橋の山の上にあった時代から約40年間、私ども同窓生に手をとって教えてくださいました。

本当にありがとうございました。心からお礼申し上げますとともに、ご健勝をお祈りいたします。また、技術員の高橋信一郎先生が学校をお辞めになり、(財)日本電気用品試験所研究部

に勤務されることになりました。高橋先生には、学科で、また同窓会の会務の執行にご尽力をいただきました。お礼申し上げますとともに、これからのご活躍を期待しております。

新任の先生は、教授に稲葉次紀先生が就任されました。先生は(財)電力中央研究所からおみえになりました。専門分野は発変電工学であります。また技術員に赤木正宣先生、鈴木宏明先生、関信孝先生が就任されました。先生方にも同窓会へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

同窓会では、本年度は、各年度の卒業生・会員の活動状況を広く紹介して、同窓生の絆を強くして行きたいと思っております。どうぞ皆様の近況や思い出、連絡したいことなどを会にお知らせください。写真などがありますと一層よろしいかと思っております。お待ちしております。

また、ことしの同窓会総会は来る11月5日(土)に原宿駅前の「南国酒家本館」で開催いたします。皆様のご出席をお願いいたします。

皆様のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

(昭和32年卒)

新任に際して

教授 稲葉次紀

本年4月より電気・電子工学科に教授として勤務することになりました。この度の着任に際しましては理工学部長、電気・電子工学部主任をはじめ多数の先生方のお骨折りによるものと深く感謝致しております。

これまで（財）電力中央研究所におきまして、23年に亘り主として送配電線路のアーク故障現象の解明と対策の構築を担当して参りました関係から、本学におきましては「電力エネルギー工学」を主宰できればと思っております。本年度の授業では、発変電工学、電気工学概論、電磁気学演習を担当させてもらう予定です。

す。これまでの電中研における経験をまじえつつ、最新の技術情報を講義に折り込みたいと思っております。

最近、何事をやるにつけても、環境問題避けて通ることはできません。電気エネルギーの特徴、特に3000度以上の超高温を容易に発生できるアークプラズマエネルギーを用いた廃棄物の減害や無害化など電力エネルギーの輸送と利用の両面を基礎的な観点から追求できればと思っておりますのでよろしくご指導をお願い申し上げます。

定年を迎えての回想

安藤敏雄

同窓会々員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、私こと平成6年3月末をもって長い歴史と栄ある伝統がある思い出多い中央大学を、定年退職いたしました。振り返れば中大に採用されたのが昭和27年4月、現在の理工学部の前身である工学部で発足して1年目の年であった。以来42年にわたる長い年月を中大のお世話になったことになる。私の人生生活の殆んど大半をさほど大きなミスもなく過ごさせて戴き、つい昨日のように思え感無量を覚えずにはいられない。

当時の工学部（元町校舎）はJR水道橋駅を降り、都立工芸横の急坂をのぼりつめた右側4階建のビルだった。土木、精密、電気、工業化学の4学科があり、学生実験も今日みるような立派な、豊かな装置、設備などなく殆んど手作りで大変にお粗末のものだった。学生実験のないときは少しでも可能な限り満足のものを作ること汗した日々であった。学生数も少なく

真面目に、真剣に、実験にとりこんでおった。名前も顔もすぐに覚え、家族的な情味があった。昭和35年に入って安保反対運動は頂点に達し、デモ隊は国会周辺におしかけ国会を取り巻いた。そして全学連主流派が国会へ突入を図り女子学生樺美智子さんが死亡する痛ましい事件が起こったのである。38年新しい技術改革を求め、手狭な元町校舎から現在の富坂へ移転したのである。待望の校舎ができ本格的な授業、研究活動、学生実験ができるような体制が整い、面目を一新して飛躍的な進歩をとげ発展したのである。

43年前後には、各地の大学で授業料値上げ反対等々運動がはじまり、中央でも大学構内に他大学の学生とも思われる者が入校し、手当たり次第器物を破壊し暴撃の限りをつくした。闘争は益々エスカレートし授業も続行不可能となり、遂に学園をロックアウトし学年末試験、卒業試験等はすべてレポート提出に切り換えざるを余儀なくされ、大学の最大行事の一つである入学

試験も外部で行うなどの異常な状態となった。

いつしか紛争も終り再び笑顔に満ちた明るい学園で、授業が再開され学生も常識的な行動をするようになったと思う。

電気工学専攻の学生は実験は必修科目になっているので、卒業生総数7,300名余の方と接したことになる。また卒業研究等でも何等かの関わりを持った人も多数おり、卒業生諸君が広く多様な分野でさまざまな活動をされ頑張つて居られることを聞き自分の息子のように思えて大変嬉しい。バブル経済の崩壊

後しばらく不況ムードが続き最近ほんの少しばかり明るいニュースも聞かれはじめたが、急激な円高ばかりが先行するのは一抹の不安が感じられる。

今日の中大は質実剛健の校風のもと幾多の困難を乗り越えて、文系、理工系で6学部26学科をもつ私学のトップクラスの総合大学に発展、飛躍した。中大に勤務し42年という長い年月を回想し多くの先生、職員、学生、卒業生諸君のご指導、ご援助に深く感謝を申し上げ、中央大学の益々のご隆昌とご発展、同窓会々員の皆様のご健闘をお祈り申し上げる。

中大での生活を振り返って

深井 昌

同窓生の皆さん、お元気にお過ごしのことと存じます。時の流れは早いもので、退職してから、はや数ヶ月経ってしまいました。いま、改めて在職中いろいろお世話になった各位にお礼を申し上げます。退職したら、あれもやりたい、これも片付けなくてはと、自由になることへのひそかな期待を持っておりましたが、いまだにその何分の一のことも達成されないまま徒らに時を費やしている現状です。時間や仕事に縛られていた、あの頃が妙に懐かしく思い出されてなりません。長い間の勤務中に自分が何を成しとげ、どのような実績を残したかを振り返ると、これと人に見えるようなものは何もなく恥ずかしい思いです。強いて云えば、接し得た7千人余の卒業生の方々の何人かの記憶の中に、私と云う人間の印象があれば、多少の存在価値があつたのではないかと感じております。私としては、これだけで充分満足すべきでしょう。

私が縁あつて中大にお世話になつた昭和31年4月から、今も在職しておられる先生方は、猪狩前理工学部長、小林健一教授、および有馬、鈴木、山口先生のみとなつてしまいました。遠藤教授は当時はM1で、市川先生はまだ学部の3年生位であつたかと思ひます。

先生は当時からどこか芯の強い、きかぬ気のある学生であつたような気がいたします。いま学内外を問わず、国際的にも活躍中の篠田現主任教授や木下教授は、果たしてその頃、大学への入学を予期しておられたことでしょうか。

まったく、ついこの間の事のように感じておりましたのに、はや40年近くも経ってしまったかと思つて不思議な気さえいたします。「少年老い易く、学成り難し」とは、まさに私のために作られた言葉ではないかと、今頃痛感しているところです。

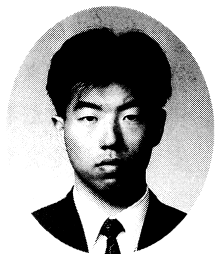
ご承知の通り、校舎、施設、研究設備等々は申す及ばず、新鋭、優秀な教授陣を加えて、今や母校の発展は目覚ましいものがあり、卒業生諸氏の、社会における評価もゆるぎないものとなっております。一方当科の学生の構成も、数年前からは、女子の姿も多くなり、その大半は大手企業で男子に伍して活躍しておられます。毎年卒業式には、昔の卒業生には思いも及ばないような彩りが見られます。同窓会の総会なども、この方々のご出席が多くなれば更に盛り上がるのではないかと、内心期待しているところです。

変化に乏しかつた学園生活の中で、心に強く残つて

いるのは、あの昭和40年代半ばの学園紛争のことです。校門に山と積まれた机のバリケード、拡大教授会と称する会議に長時間拘束されたこと、寒中、泊り込みで警備に当たった他校々舎での入試、実りなき学生達との対話集会、中でも酷暑八月半ばからの実験授業の再開は今もって忘れられない強烈な思い出として残っています。あの出来事の功罪を今更云々してみても始まりませんが、あれ以来、学校の管理面が強化されたような気が致します。一例を挙げれば、それまで24時間出入り自由であった学校の研究生活も深夜や休日の使用に際しては、いちいち届けを出さなければならないほど、真面目な研究者にとってはちよつと不便なことではないでしょうか。ただ、あの紛争のおかげで、普

通の時以上に親しくつき合えるようになった学生諸君も多くあり、今も継続していることは逆に幸せと云えるでしょう。

さて、私にとって、年1回の同窓会は、今までも楽しいな行事であつたわけですが、これからは益々その思いが強くなることと思います。それにしても、このところ参加者が漸減しているようで淋しい限りです。青少年の理工離れが云々されている昨今、われわれは、今こそ理工学の魅力を揚言するため、同窓生のきずなを大切に、結束を強化して、この不安定な時代を乗り切つて行こうではありませんか。最後に、皆様の益々のご健闘をお祈り申し上げます。



社会人になって

平成6年卒 樋口 哲

私が社会人になってから早いものでもう4ヶ月が過ぎようとしている。今、思い起こすと学生だった頃が少しばかり懐かしく思ってしまうものだ。

現在、毎日6時20分頃に起床し、7時20分頃に家を出る生活をしている。この様な事は学生時代には考えられなかった事である。強いて考えたとしても、不幸も1時限目に（出席しなければならない？）授業があつたときぐらいだつたであろう。

毎日朝早く起きて同じ職場に向かう。それが社会人になって大きく変わった生活上の出来事の一つであると思う。しかし就職を内定した去年に想像していた社会人とどこかが違うのだ。それもそのはず、毎日の服装が学生時代と何ら変わらないからだ。4月1日の入社以来、2週間程は研修等の為にスーツを着用し社会人らしく通勤していたが、その後、現在の職場に配属されてからというもの、特別な事がない限りスーツなど着ずに学生と同じジーンズで通勤しているのであ

る。私の職場はオーディオの回路設計を行う部所なので、はんだごてを用いたりすることもありスーツ着用の義務はなく、そのようなラフな雰囲気の中でスーツ姿でいると一目で新人とわかつてしまう事もあり、すぐに私服に変えたのである。服装が学生のままなので、傍から見れば学生に見えるかも知れないが、一步職場に入ると、ラフな雰囲気の中にも大学にはなかつたすごさが感じられる。私はオーディオに興味あり、その動作や仕組みを普通の人よりは知っていると思う。しかし職場の上司や先輩は動作や仕組みはおろか、回路までを自分で考え、それを商品化するという事をしてきた人々なのですごいという言葉につきるのだ。そこから中、私の知っている機種を担当された人々ばかりなのだ。

昨今、不況や円高等でコスト削減が求められている中、設計者には使用する部品原価を一銭でも安くしなければならぬという考え方が強く、部品を無駄にせず安く品質を落とさず、また製造しやすく不良の発生

しくくなる様に設計する事が求められている。このような中で本当に私もこの人たちのように回路を設計することが出来るようになるのか不安である。しかし私は山のような部品や次期モデルの試作品に囲まれた職場にただ居るだけでとても楽しく思えるし、不況と言われる中この様な希望通りの仕事に就くことが出来て本当に幸せだと思ふ。まだ楽しいと言えるのは本来

の仕事の辛さがわかっていないからかも知れないが、毎日毎日が新しい発見の連続でその様な事はまだない。とりあえず早く回路設計者として早く一人前になることを当面の目標とし、後にはお客様に喜んでいただける商品を店頭に並べることをして行きたいと思つている。
ソニー（株）



“自分”と社会人

平成6年卒 神谷 絵美

学生の頃はレポートに追われ、テストに追われ、そんな毎日を過ごしているように感じていました。しかし今、思い出してみると、様々な体験、経験をしておりました。中央大学での4年間の生活があったからこそ、現在の書生がいるといつても過言ではありません。大学生活を思い出してみると、今だから笑つて話せるということが多々あります。

第1学年の最初の頃のことです。当時、半年間は、家から2時間かかる多摩校舎に通つておりました。ちょうどその頃、運転免許証を取得するため、自動車学校に通つていたのです。その為、大学の方は“自主休講”が増えました。そして履修届け、提出日を迎えます、受付時間は5時まででした。しかし、その日書生は、仮免許の試験に行つてしまったのです。試験を終え、学校に着いたときは、5時20分頃でした。幸い、理工分室の事務課の方がいらつしゃつて、受付て下さいましたが、あの大学までの2時間という時間を忘れることはできません。受付て下さらなかつたら、入学金、授業料を出してくれた両親に何て言えば良いのだろうかと真剣に考えておりました。あの時、たまたま、その日は遅い時刻までお仕事をなさつていたという事務課の方々には、感謝しても、したりません。

何という、ずうずうしい学生でしょうか。今考えて

もドキドキいたします。

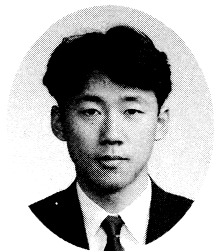
また、実験レポートでは、多くのお目にかかつていない諸先輩に御世話になりました。書生の少ない学力を最大限に表すために、種々の偉大な著者の方々、諸先輩のお言葉をお借りしました。それでも、まだ不充分だと考えた書生はこの“書生”という言葉で文学小説からお借りして、引用させて頂きました。レポートに好印象を与えるのにかなり役立つのではないかと思います。

このように書いておきますと、本当は何にもしてなかつたのではないかと思われそうですが、書生なりに一生懸命学生生活を過ごしました。学業を通して努力すること、がんばることを学びました。そしてアルバイトで、人と接すること、ふれあうことを学び、就活動を通じて自分を表現すること、他の人に“自分”というものを理解してもらうことを学びました。毎日毎日が社会にできるための1ステップであり、勉強であったと思います。

現在、社会に出て、社会人の大変さを痛感しております。両親の努力、忍耐を身をもって体験しております。人は何年、歳をとつても、毎日が勉強であり、一生懸命でなければならないのだと思う、今日この頃でございます。

[セコムシステムズ（株）システム企画部]

「建設と電気」



私は今この手紙を日中39度にもなる山梨にある塩川ダムという作業所で書いています。私は

入社してまだ3ヶ月ぐらいですが、研修中で1ヶ月土木現場研修というのがありまして、ここに配属されました。なぜ電気出身の私がこのような建設会社に入ったのかといいますと、電気出身の方は、おもに電気メカー、自動車、建設関係にしても電気設備会社などに入るのが普通だと思います。しかし、私は変わり者で、電気でも変わった形で、電気出身者が少なく必要としている所で活躍できないものか考えました。新聞でも雑誌でも自動化、機械化、などよく目にします。私が興味をもったのは、建設工事における機械の自動化です。今の時代、産業界では、高度な先端技術が次々と実用化されています。それは建設の世界でも同じです。

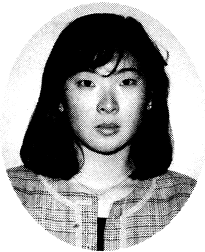
例えば、人工衛星を使って瞬時に連続して三次元座標を計測する精密測位システムや、どんなに深い地下の掘削でも誤差を5cm以内に制御する高精度位置管理

システムがすでに稼働しています。また都市トンネルの主流であるモグラの様な機械が地上のコンピュータ制御で自動掘削するシールド工事でも、特殊な断面施工を可能にする工法や、自動化技術などが開発されています。さらにビル建設現場で作業員の代わりとなって働く施工ロボットやメンテナンス用ロボットも実際に使われています。ただ建造物をつくるのではなく、より短期間に正確でしかも安全につくるには今までにない新システムが必要となり、画期的な工法や技術を開発しなければならないでしょう。そのためにどうしても機械や電気電子をはじめとするメカトロニクス技術、エレクトロニクス技術に頼らざるを得ないと思います。

たった3ヶ月近くの研修中で、いくつかの現場をまわり、いろんな方々に会い、仕事面だけでなくいろんな意味で勉強になっています。これから、全国各地、いろんな現場に行くと思いますが、自分自身電気という枠だけに取らわれず、もつと広い視野をもつてさまざまなことに挑戦し、失敗を恐れず、勉強をしていきたいと思います。

(大成建設株式会社)

企業に入社して



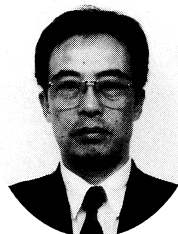
入社して約3ヶ月半が過ぎました。配属は私の希望通りのところで業務内容は単一无線装置のハードウェアの設計です。この職場に配属されて3週間が過ぎました。最初の一週間は職場にも仕事にも慣れていないため失敗も多く、手際も悪く、2日目には初めて実験させてもらったのですが、実験開始と同時に装置をこわしてしまいました。このことでこの先仕事をきちんとやって

平成6年卒 井澤 さおり

いけるかとても不安になり、会社に行くのがすごく憂うつでした。同期の人や大学時代の友達と話をしたら皆同じような悩みをもっていてお互いに励まし合うことができました。3週間過ぎた今では会社に行くのが楽しいです。というのもだいぶ職場の雰囲気にも仕事にも慣れて来たからです。仕事は1から覚えることばかりで、今まで一度も使ったことのなかった半田ごても、今は、実験室で半田ごてを片手に簡単な回路では

ありますが作れるようになりましたし、実験装置も使いこなすというまではいきませんが、それなりのことができるようになりました。一つのことには熱中していることが多いため1日があつという間に過ぎていきま
す。最近仕事をしていて行動1つ1つに責任を感じ、

学生時代とは違うということを感じています。まだ技術も知識も未熟で、学ぶことも多いですが、いろいろな面から多くの技術や知識を吸収し、身につけ、早く自分が作った製品を世の中に出せるように頑張りたいです。
(沖電気工業)



Man Machine Interface

昭和39年卒 藤 森 勲

母校を卒業してから今年で早や30年になる。この間の世界情勢は変動の連続で、特に最近の20世紀最後の10年に入ってからは激動しており、現在なお続くこの激動の中に我々はいる。マクロ的に見れば人類にとってより良い方向に動いていると私には思えるが、この速度で変化すると、来るべき21世紀にはどんな世界になっているのか予測もつかない。

電気・電子工学科卒業の我々に関係する技術分野でも、半導体電子技術の進歩に伴うコンピュータと通信技術の進歩は目覚ましいものである。最近普及しはじめた携帯電話は通話の音質で有線電話に劣りまだ物足りないが、近い将来改善されるであろう。コンピュータもマルチメディア技術の確立と共に更に人にやさしい使いやすいものが出現するであろう。人間だけが変っていないように思われる。(この30年間で平均寿命が約10年延びて人生80年にはなっているが。)

進歩した機械システムと変わらない人間との係り方で気になる事が最近また起きた。

今年4月に発生した中華航空のA320Aの墜落事故である。A320Aはコンピュータによる自動操縦機能とパイロットによる手動操縦機能があるが、自動操縦の方が上位になっている世界初のシステムときいていたものである。墜落の原因の最終結論は未だ確定していないようであるが、報道された情報をまとめると、どうも、機体の同じ姿勢制御をコンピュータによる自

動制御時とパイロットによる手動制御時では制御する対象物が異なるというシステムであったこと。即ち機体を上昇または下降させる制御を、自動的には水平安定翼の角度を変えて行い、手動時には、通常の航空機と同様に昇降板を上げ下げして行われていたこと。また、最悪なことは、このようなプロトコル(機械と人間の約束事)をパイロットが熟知していなかったので、それぞれの機能が反対動作をし合い、その結果、パイロットには何がどうなっているのか皆自分からないまま、失速墜落という悲劇が発生してしまったようである。制御を手がける技術者として、何故このような、自動と手動とで制御対象物が異なる複雑なシステムが採用されたのか疑問である。

人間と機械を結合させる手段を Man Machine Interface というが、この手段は人間という生物の習性に合致したものでないと困る。人間工学という学門野もあるが、人間はよく間違いを犯す。感違いをして、思い込んで、時には何も考えずに普段の習慣に従い行動して、である。毎日の通勤時の電車の中で、車掌が次の停車駅の名前を間違えてアナウンスしたり、バスの運転手がボタン操作を間違えて次の停留所の名の表示が間違っていることなど皆様もよく経験されるでしょう。自動制御は、このように間違えを犯す人間を助けこそすれ、人間に混乱を起させるようなものであってはならないものである。

1979年に発生した米国のスリーマイル島原発の事故

の時も同じことがいえた。この事故は、二次冷却水ポンプが故障した際オペレーターの操作ミスが重なり、その結果放射能汚染された一次冷却水が建物内に漏れ、ついには外部に漏れ出るといった事態になった事故である。この時オペレーターは二次冷却水ポンプの運転表示灯が点灯していたため、冷却水が正常にながれているものと思い込んでいたらしい。この運転表示灯は、一般のモーターの運転表示によく用いられる方法と同じで、ポンプのモーターに電源が供給されている状態を表示しているだけで、実際にポンプが正常に作動し冷却水が流れている状態を表示するものではなかったのだ。正常時には、この表示灯が点灯している時は確かに冷却水が流れており、冷却水ポンプを停止させ冷却水の流れを止めれば、この表示灯は消灯する。このような日常の習慣により、オペレーターは、当初は

認識していたこのシステムのプロトコルを忘れてしまったのであろう。この思い込みにより他の要素（圧力逃がし弁も動作不良を起した）が重なり、大事故になってしまったという報告書が長年の調査の末発表された時は、原子力発電所という重大な設備の計装に、家庭用品と同じレベルのシステムが用いられていた事に大変驚いたことを思いだす。

今後ますますハイテク技術が開発され、マルチメディアなどの技術が家庭にも入り込んでくるであろう。一方、進歩の少ない人間社会は、ますます高齢化社会となる。ハイテク技術の恩恵を真に人間が享受するためには、その技術が非専門家の利用者にやさしいものでなくてはならず、結局はMan-Machine Interfaceが重要なポイントとなってくると思われる。

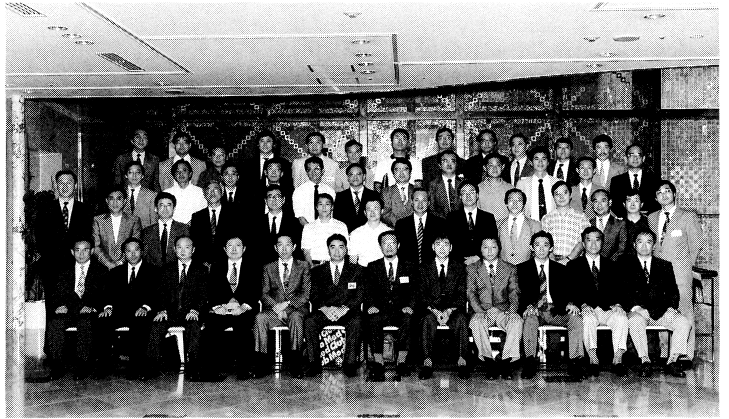
(イセキ開発工機技術担当部長)

クラス会報告

昭和47年卒 飯塚信市

平成5年9月18日土曜日午後1時30分～3時30分、私共クラス会幹事が待ちに待ってありました中央大学理工学部電気工学科昭和47年卒1組・2組合同クラス会が、汗ばむような好天の中、神田駿河台、中央大学駿河台記念館1階レストラン「プリオール」におきまして、同級生50余名の参加の元に、立食パーティー形式で賑やかに催されました。

パーティー開始に先立つ受付では、なにぶん21ねんぶりの面々を迎えることもあり、顔と名前の不一致を予想して、あらかじめ50余名分の白紙のネームプレートを用意し、これに自分で名前を書き込み各々の背広の胸に付けて頂くと言う手続きをとりました。案に違わず、21年の歳月は、顔かたち、体型、髪の様子にと、容赦なくその猛威をふるったようで、会場に次々と訪れる面々も、しばし互いに顔を見



合わせ、「よー、おまえ…、～かー」と言った具合で、再会に至る月日の流れを実感せずにはおれませんでした。

パーティーは、電気科1組のクラス委員でありました中村保徳君の乾杯の音頭に始まり、その後、堅苦しい挨拶などは一切なく、直ちにビール、ウイスキーを

片手に料理を食べながらの会員同士の賑やかな懇談に移りました。なにせ、最大収容人数50名の会場に50余名が集まり、しかも2時間しかないわけで、とてもひとりひとりの近況を順に発表して戴く余裕などなかったわけでありませう。とは言え、菅原正人君の計らいで、パーティーの合間に10人づつ前に並んでもらい、一括して全員を紹介すると言う形で会員同士の周知が図られました。

と言うわけで、予定の2時間はアツというまに過ぎ去り、菅原正人君の終了の挨拶に続き、全員での記念撮影を行ったのち、気のあった仲間同士の4~5のグループに分かれ、会館近くの喫茶店で二次会へと移りました。勿論、ここでも暗くなるのも忘れて、懐かしい学生時代の話の花が咲いたことは言うまでもないことであります。

さて、今回の合同クラス会の幹事としての感想を皆さんを代表してここで一言。長い人生の中で、職場の付き合い、地域での付き合い、も大事でしょうが、こんなクラス会も3~5年に一度程度はあつてもよいのではないのでしょうか。欲を言えば、温泉にでも泊まりながら、ゆつくりと語り合えたり、麻雀でもしたり、カラオケでもしたり、ゴルフでもしたり…。また、行く行くは、女房、子供連れでも…。或いは、いくつかの地域ごとの小人数のクラス会をより頻繁に行ったり…。そんな訳で、次回のクラス会をご期待頂きたいと思ひます。また、都合で今回は参加されなかつた方々も、次回は是非参加されて戴きたいと思ひます。で、皆さん縁あつての仲間です。次回のクラス会まで、各自の職場で頑張りましょう。

(飯塚特許事務所)

我家を改築中

昭和47年卒 中 嶋 隆 一

私の家は築後250年余り経った古い家です。

この家を改築しようと思ひ立つたのは、寒い、暗い、古い、と三拍子揃って使いにくかつたせいです。しかし最近では改築するよりすべて壊して新築するほうが一般的だと聞きます。

250年余り経ったこの家をみているとあちこち造つては壊し、また直している跡が見えます。特に柱などは穴があちこちらに明いていてその跡が顕著です。

とくに台所、風呂、便所などは良く手を入れています。

30年前までは風呂と便所は離れたところに建つていて、子供の頃風呂に入るのに寒くまた便所に行くのに怖くて仕方がありませんでした。それに便所はくみ取りでしたので下から何か出てきそうで大変怖かつたものです。

今回は何回目の改築かは解かりませんが、特に台所を中心に工事をしています。

普通は改築部分の解体は、重機をつかつて「バリバリ」壊して済むわけですが、この工事では、大工が神経を使いながら天井、壁、床と壊して行きます。

天井を壊すときなどは、250年の埃が落ちてきて、大工の白い作業服が一瞬のうちに黒くなり、顔も真っ黒、その上まだ真っ黒な梁の上には埃が一杯でほどほどにしてもらいました。

床を壊していきますと、ただ土の上に石を置いて、その上に土台の木が乗っているだけ、こんなもので長く建っていると感心するほどです。

建築にかかりますと、設計図はあるのですが既設の梁、柱、一部の壁をそのまま用いるので大変です。

柱は傾いているのでそれに合わせて壁を作つたり、

使おうとしたアルミサッシがはいらなかったりと悪戦苦闘でしたが、あと一週間余りで完成です。

卒業後しばらく東京にて就職しましたが、現在は故郷の信州、松本に帰っています。

(今毒ガス事件で話題になっています)

松本は寒いので床暖房を入れました。

今年の冬が楽しみです。

次の改築は私の子供がやるのでしょうか、250年余り経った家、300年、400年とそれぞれの時代で改築をしながら残していつてもらいたいと、新しくなったところをみながら考えています。

(中島電気設計 (株))

会社員5年生のぼやき

昭和63年卒 伊藤道弘

この商売に就いて以来、毎秒50回ほど会社を辞めなくなる。その一方で、毎秒51回ほど、まだ残っていた方がいいと思う。ここではそのあたりの事情を少し述べてみたい。

今の仕事はASW機材の製造である。ASWとは何か。対潜水艦作戦の英語Anti Submarine Warfareの略である。意味は書いてあるそのまんま。

三鷹の無線会社、日本無線が海上自衛隊殿へ納めさせて頂いているのは、対潜哨戒機P-3C航空機搭載用ASW機材で、具体的にはソノブイ受信機とソノブイレファレンスシステムのライセンス生産である。

前者はソノブイという水中マイクロフォンが送信する電波を機上で受信する装置で、後者はソノブイの位置を測定するセンサである。要するに2つとも無線関連の機材である。

空から海の底を探るといのは、どだい無理をとまなう話である。水の中は電波が伝わらないから潜水艦が潜望鏡を出さない限りレーダーは効き目無しだし、鉄で出来た潜水艦が存在することによる地磁気の異常を感知する方式は、よほど近くでないとならぬ。ということで、潜水艦の感知には、水中音響の解析が主に用いられている。

ところが、水中の音の伝わり方は、塩分濃度、潮流、温度もろもろの要因で、非常に複雑である。どの程度複雑なのかは、水中音響という学問領域があり、IE

EEにUnderwater AcousticsつというTransaction (紀要)が出るくらい複雑なのである。

もつとも、音の伝搬云々はJRC担当機材には直接関係の無い話。問題はソノブイから飛行機までの電波伝搬である。陸上移動通信、衛星/船舶間通信には非常に多くの文献がある。けれどもいまいちらが問題にしている話には、「オーソライズ」された資料が見あたらない。

このあたりは自分達で仮定する電波伝搬モデルなり設計ノウハウなりで対処するのだろうか、どうしてこうも実務の問題って、「答」がないのであろうか。逆に、オーソライズされたものであれば、何でも許されるのかと思ったりもして、自らの能力の不足と歯がゆさを痛切に感じる。

さて、ぼやきだけではつまらないだろうから、おもしろい話(?)。ASW業界の中での中大人、それも電気工学科の出身者。92年9月、わが恩師、福沢先生の謝恩会が盛大に行われた。その宴席でたまたま、今大変お世話になっているN電気のN様とお会いすることができた。おいらより30年先輩である。偶然なのか必然なのか、とにかくこのときは驚きました。

もう一人、業界がらみの宴席で、I通信機のX先輩にお会いした。これまたびっくり。その立食パーティーで初対面のこの方となんて話が始まったのか、そしてどうして中大に話がいったのか記憶が定かではない

が、お互い中大人の臭み（香りと書かないところがいいでしょ）を感じ会ったのだろうか？

さて、ASW中大人は官側にもいらっしゃる。海上幕僚監部におられる、T一佐殿とS二佐殿である。この方々とはお互い中大の件はまだお話ししてはいない。そんな「余計」なハナシができる状況ではないから。官側にうかがう時はいつも、シリアスなんです。

さてASW話はきりがないので、いささか尻切れとはなるがここで締めるとする。最近、防衛予算削

減話やらでこの業界結構きびしくなっている。おいらみたいな下のレベルとしてはあまり関係が無いといっちゃあそれまでだが、気にはなる。けれども、「空から海の底を探る」どだい無理なハナシと、眉間にしわを寄せて大まじめに取っ組みすのもいいじゃあないかと思う。そんな人たちが官にも民にも大勢いるってことを、お尻に尻尾みたいのがついた白い四発プロペラ機を見かけた折りには思い浮かべてみてください。

国境の町パッサウと海岸の町サンタバーバラ

—在外研究中の1年—

1. 出生

中央大学における情報工学科新設に少しは役だったからか、あるいはカリキュラム編成の関係からかどうかわかりませんが、当時理工学部長であった猪狩先生のご尽力のおかげで、3年程繰り上げて1年間の在外研究に出かける機会が与えられました。そこで、1993年4月から4ヵ月半ドイツのPassau大学に、残りはCalifornia大学Santa Barbara校に出かけることにしました。ドイツ語はほとんどできないので、家族はアメリカだけに連れていくことにしました。

この在外研究では、残念ながら半分程しかできていませんが、アルゴリズム設計に関する本を執筆すること、並びに、より高性能なVLSI用CAD、例えば、レイアウト設計を考慮した論理設計や、タイミングを考慮したレイアウト設計を行うCADについて研究することを目標としました。研究成果の方は、論文等を見て頂くことにし、小文ではあちらの生活での感想を綴ってみたいと思います。

2. パッサウ (Passau)

パッサウは、ローマ時代の遺跡も残っている人口5万程の古い小さな美しい町で、ミュンヘンの東約200km、オーストリアとの国境にあります。黒色をし

理工学部情報工学科教授 築山修治

た少し小さなイルツ川、茶色いドナウ川、水量が多く深い緑色をしたイン川がこの地で合流し、この先ドナウ川という名でウーンの方へ流れて行きます。川が三つも集まっていますので、洪水が多発し、滞在中の7月にも川側の道路は冠水しました。

パッサウ大学の計算機科学部は、数学関係の教員も含めて約15名の小さなものですが、雑誌Sternに掲載された大学のランキングによると、教授の質や教育レベルでは上位に入っています。ただし、就職する企業の少なさが原因か、町の魅力だけは下位にランクされています。このランキングは、大学教授による他大学の評価を総合して求めたものですから、信頼性は高いでしょう。学生数は約九千で人口の1/6を占めていますので、地方紙(Passau Neue Press)に大学用のコラム(なんと、私の訪問と講演案内の記事もある)があったり、市議会議員に学生代表が居たりと、大学は町において重要な位置を占めています。

こちらに来てすぐ気の付いたことは、頻繁に挨拶の言葉を交すことです。店で、バスで、通りで、職場で、大学で、あらゆるところで、言葉を掛け合っています。“Grüß Gott”(今日は、バイエルン地方特有の挨拶)と私にも声を掛けるのですから、知り合い同士でやって

いるだけではありません。バスの運転手にも皆挨拶しています。バスの乗り降りの際、運転手に挨拶するのは今でも日本の田舎で見ることがありますから、ここは都会ではなく田舎ということなのでしょう。

6月7日の朝、洗濯物をを庭に干して大学に来ました。このところ暑い天気の良い日が2日ほど続いていましたし、その日の朝も良い天気でしたから、雨は帰ってくるまで降らないだろうと思ったわけです。ところが、その日の正午頃一転俄にかき曇り、すごい雷雨がやってきました。雨の振る直前に洗濯物のことを思い出したので、私の下宿先の大家さんに電話をかけ、洗濯物を取り込んでおいて貰おうとしたのですが、電話は通じません。土砂降りの雨を見ながら、タオルも靴下もパンツも洗い直しかなと思っていたら、帰ってみると何と隣のFuchs（狐）さんが雨のかからない方の軒下に洗濯物を取り入れておいて呉れました。これも、日頃から挨拶の言葉を交していたおかげだと思っていますが、やはり田舎ならではの良さでしょう。

大学へはバスで通学していました。バスはワンマンで入口は前なのですが、乳母車用のスペースがあり、乳母車は降り口から乗れるのです。乳母車は折り畳んで使用しろなどとも言いませんし、乗り降りの際には側にいる誰かが必ず助けます。また、バスに乗っているのは年寄が多いのですが、その為か、乗ってきたお年寄りが席に着くまで発車しない等、バスものんびりしているようでした。

ご存知のように、ドイツでは1週38時間の労働時間のところが多く、金曜日には3時になると大学も閑散としてきます。旧東ドイツ側に流れるお金の額と、この労働時間の少なさのために、ドイツの将来を嘆く人が沢山いました。もちろん、管理職はもつと働いており、先生やアシスタント（日本の博士課程後期の院生に相当するが、給料を貰っている）は土曜日にも必ず何人か来ていました。しかし、町の大多数の人は趣味のクラブなどで余暇を楽しんでいるようでした。ドイツでは、3人集まればVerein（クラブ）ができるという

そうで、多くのクラブがあるそうです。この町では、チェスやカード等のクラブの会合場所は普通のレストランです。そこでは、安い値段で一杯やりながら（ビール500mlが約200円、Weissen Bierがうまい！）、何時間もゲームを楽しめます。日本、特に都会ではまず不可能なことでしょう。

このような田舎の大学町に居たおかげで、物価の安さ（ミュンヘンの2/3以下）、治安の良さ、それに人情味を十分に満喫できました。生活費が安かったため、旅費にお金を回し、ドイツの3大学1研究所2企業を訪問しましたが、都会にはホームレスが居たりし、その差を感じました。

3. サンタバーバラ（Santa Barbara）

サンタバーバラは、北は山に南は海岸に挟まれた神戸のような地形の美しいリゾートタウンで、ロスとの西約200km程のところにあり、レーガン元大統領やマイケルジャクソンの農場等も近くに 있습니다。人口や大学関係者の比率など、パッサウとよく似ており、学生達が多く住んでいるアイラビスタ（Isla Vista）での万聖節前夜（Halloween）には、州外からも若者が集まり毎年騒ぐそうです。幸い去年は警察の警戒も万全だったのか死者も出ず、比較のおとなしいお祭りでした。

カリフォルニア大学サンタバーバラ校は白い砂浜が続く公園の側にあり、校内に潟もあります。電気計算機工学科には約15名、計算機科学科には約10名の教員が居り、工学関係は毎年研究成果を公開する日を設けるなど、活発な研究活動を行っています。パッサウではほとんど日本人と出会いませんでしたが、さすがアメリカ西海岸です。結構多くの日本人が居り、電気計算機工学科関係には日本企業から化合物半導体の研究者が4人も来ていました。

こちらには家族を連れてきました。子供（小学2年と中学1年の女子）は凡そ2ヵ月程で現地校に慣れ、友達もできて機嫌良く通いでしたが、宿題の和訳英訳は親が手伝いました。初めは子供も英語が全く分

かりませんでしたので、夜の11時までかかることもあり
ました。10年ほど前に聞いた話では、小学校などは
全然宿題が無いということでしたが、今は、少なく
とも子供の小学校および中学校では、毎日沢山の宿題が
出ましたし、小学校では2学期頃から能力を見ながら
個人別に量を加減することもしているようでした。し
かし、週末には全く宿題がありません。このおかげで
週末は家族で幾つかの小旅行ができました。実は、ご
存知の1月のロス地震の6時間前に、その震源地の横
をこのような小旅行からの帰りに通過していたのです。

小学校から1月12日にFamily Mathを夜7時から8時
まで行うという通知が来ました。『家族で数学』とでも
訳せばよいのでしょうか、6年生とその親と一緒に数
学を勉強しようという会です。子供と一緒に親も勉強
することにより、子供の算数嫌いを減らそうという試
みなのか、数学ができない親も多いので、この際両方
まとめて教えようというのか、その理由は行かなか
ったので分かりませんが、6年生位の算数が大多数の人
にとっての好き嫌いの転換点なのかもしれません。2
月にはFamily Scienceの案内も来ました。

アメリカでの数学あるいは算数の進み具合が遅いとい
うことは良く知られていますし、実際、中学校でや
っている数学の計算ときたら、英語さえ分かれば日本の
小学生でもできる単純なものがほとんどです。また、
文章題は日常生活を題材にし、特に商売や株の話が多
かったような気がしました。しかし、概念だけはちゃ
んと教えているようで、数の概念や図形の性質などは
日本の中学とあまり変わりません。日本では、数学嫌
いからか、学生の理工離れが進んでいるようですが、
受験の為に全ての生徒に不必要に難しい問題を解かせ
ているのかもしれませんが。

終わりの2ヵ月ほどは親もほとんど手伝わなくても
よくなりましたが、中学の子が困ってしまった宿題で
面白いのが1つありました。その頃は科学の授業で生
物を学んでいたのですが、生物の分類について考える
宿題で、異なる形状の飛行機の絵が8つあり、それら

を特徴によって分類し、各項（部分集合）に名前を付
けよというものです。子供は答えが1通りで無いこと
に困惑し、どうしたら良いのか分からなくなったよう
でした。自分が何に最も着目するかに従って分類し、
そうした理由を人に説明できればそれで良いのだと教
えるのに時間がかかりました。この観点から見直して
みると、小学生の宿題にもどう回答しても良いような
問題が幾つもありました。先生は生徒が何か考えて答
えるということを期待しており、大人が考えて正しい
と思う答えを要求しているのではないのです。

翻つて、日本の小学校からの教育について考えてみ
ますと、そこでは、1つの正しい答えをすばやく見
出す能力、受験に必要な能力だけを磨くことに勢力のほ
とんどが傾注されています。欧米という手本があった
今までは、このような能力が最も重要だったでしょう
が、学問的にあちらから学ぶべきものが少なくなって
来た現在では、いわゆる独創性が重要であり、論理的
に正しく議論を組み立て、幾つかある解の中から1つ
を選び、その論理を人に納得させていくような問題解
決能力が重要になって来ます。このような能力が、中
大理工学部の教育目標である『科学技術のどのような
進歩にも対応できる基礎学力』の1つであり、これを
研究を通して磨かせることが我々の勤めだと思います
が、ことは大学だけでは終わらないような気がします。
4. むすび

日本社会で流布されているドイツやアメリカのイ
ージ通りの経験も多くありました。

ドイツでサララップを買って箱を開けてみたら始
まりが分からない。日本製なら、何か印か引っぱり
でも設け、剥がしやすくしていると思いますが、それが
無い。初めの何十センチかをぼろぼろにしながらい
出しましたが、いわゆるちよつとしたサービスに欠け
るところがあります。しかし、過剰なサービスが無い
点は大いに評価できます。

AAA（アメリカ自動車連盟）で車の任意保険に幾
ら位入るべきかと聞いたとき、保険の担当員は、おま

えは家を持っているか、守るべき財産を持っているか、無いなら、最低限の対人3万ドルに少し付加した安いもの（対人6万ドル）でよいのではと言うのです。結局ここでは入らず、別会社で対人10万ドルのもの（まだ少ない？）に入ったのですが、なるほどこれがこちらの考え方かと少々驚きました。

このような経験もありましたが、基本的には上に述べたように、ドイツとカリフォルニアの田舎町に居りましたので、ゆとりある人間関係の中で1年間を過ごすことができ、本当に幸せでした。また、田舎にいた判には「田舎の3年、京の昼寝」という情報の欠如を心じなかったのは、学会出席や他大学訪問などこまめに動き回ったこともあります。コンピュータネットワークに象徴される通信技術のおかげです。最新の情

報や知りたい情報は、各種のニュースや電子メールで素早く得ることができますし、残してきた学生の研究に対する指示も、持参したノート型パソコンを使って、日本語で殆ど遅滞なく行うことができました。もちろん、面と向かって話をするのでは情報量に大きな差がありますが、手紙や電話でのやり取りを考えれば、その便利さは比較になりません。これからのネットワークにおいては（人間関係も含めて）、2点間の空間的な距離よりは結合の強さがより重要になるだろうというのが結びの感想です。

話題には活字にしにくいものも含め、まだまだあるのですが、紙面も超過してしまいましたので、このような機会を与えて頂いた中央大学に深謝しつつ、筆を置きます。



学年幹事をお受けして

昭和35年卒 重政弘康

昭和35年（1960）卒といえば、既に34年経過しています。岩戸景気のまっ只中に社会に出たわけですが、丁度私の入ったAV業界も1948年発明された、トランジスター等半導体が本格的に使用され始めた時代で、TVも白黒放送だったのがカラー放送の開始へと展開した年であり業界が大きく飛躍するスタートの時期だったと思い起こせます。

その後業界は、カラーTV中心にビデオ、CDと大きく発展してきており、この発展と共に自分の人生はあつたように思えます。

この間、対米為替レートは、長く続いた360円時代か

ら1972年のいわゆるニクソンショックで、変動制となり現在の97～99円の時代となったことを思うと隔世の感がする今日この頃であります。仕事の方も忙しく働いた時代も一応過ぎ、これからいかに生きるか考えさせられる年代となりました。

今後はあらゆる機会をとらえて、先生方、先輩の方々をはじめ皆様方のご意見を拝聴して教訓とさせていただきます。と思っています。

この度学年幹事をおおせつかったわけですが、少しでもお役に立てばと思っています。ご協力のほどよろしく申し上げます。

平成4年度 会計報告

収入の部

前年度よりの繰越金	4,144,050円
平成4年度総会会費	519,000円
預貯金利息	29,873円
名簿売上代金	35,000円
終身会費	796,000円
寄付金	5,000円

計 5,528,923円

支出の部

平成4年度総会費	497,894円
通信及び印刷費	866,106円
アルバイト代	17,767円
事務・運営費	76,574円
名簿関係 印刷費	0円
通信費	5,480円
アルバイト代	0円
事務費	0円
慶弔費	0円
次年度繰越金	4,065,102円

計 5,528,923円

上記、平成4年度会計報告の収支計算は、適正に表示しているものと認める。

平成5年10月22日

辯理士

服部 修一

「中央大学白門三三会」よりお知らせ

昭和33年卒 市川友之

過日同期の永井甫氏（沖通信システム（株）代表取締役）より、発足当初の会長（佐藤光信氏 法学部卒）の名簿登録の呼びかけにより「三三会」にカード登録したとのお便りをいただきました。

33年卒業で登録された方は次の通りです。

蘆山 孝義 小林 邦男 永井 甫
有川 政志 杉山 良市 堀江 武也
今澤 茂夫 高橋 明 山村 和昭
小尾 忠利 中村 功

次に会則の一部を紹介します。

中央大学白門三三会会則

平成5年3月3日総会承認

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、中央大学白門三三会と称する。

(事務所)

第2条 本会の事務所は中央大学学員会事務局内に置く。

(目的)

第3条 本会は、会員相互の親睦を図るとともに、中央大学の興隆に寄与することを目的とする。

(事業)

第4条 本会は次の事業を行う。

- ①前条の目的を達成するために必要と認める事業
- ②会員名簿の編纂、発行

第2章 総則

(会員)

第5条 会員は、中央大学を昭和33年に卒業した者で、本会の趣旨に賛同する者とする。

第3章 会議

(総会)

第11条 本会は、原則として毎年1回定期総会を開くものとし、必要あるときは、臨時総会を開くことができる。

- 2 総会は会長が招集する。
- 3 総会の議長は会長がこれにあたる。
- 4 総会における議決は、出席した会員の過半数で決する。可否同数のときは議長が決する。

第4章 会計

(経費)

第14条 本会の運営に要する費用は、会費、寄付金および事業収入をもって支弁する。

(会計諸表)

第15条 会長は、毎事業年度の終りに、つぎに掲げる書類を作成し総会の承認を受けるものとする。但し、決算報告書については事前に会計監査を受けなければならない。

- 1 決算報告書
- 2 財産目録

(会計年度)

第16条 本会の会計年度は、毎年1月1日に始まり、12月31日までとする。

(会則の改正)

第17条 本会の改正は総会において、出席会員の3分の2以上の同意を得なければならない。

(付則)

第18条 本会は、中央大学学会の支部を兼ねるものとする。

第19条 本会則は、平成5年3月3日から施行する。

なお、目的に賛同し、登録を希望される方は、中央大学学会(03-3219-6175)に直接ご連絡下さるようお願いいたします。(この記事は33年卒業生のみなさんにご参考までに載せました。)



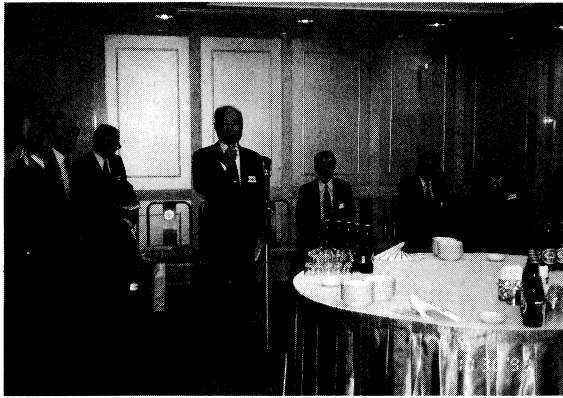
編集後記

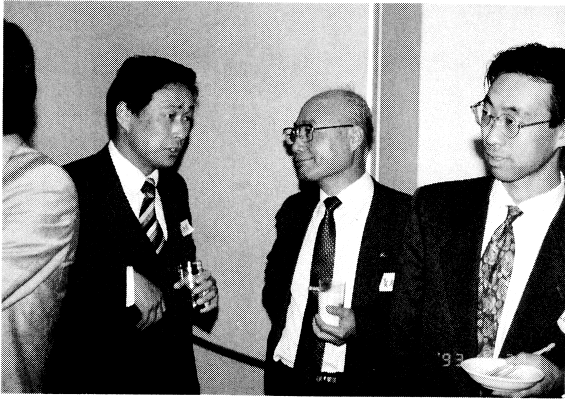
猛暑の夏が過ぎてしのぎやすい秋を迎え、会員みなさまにはいよいよこれからとはりきっておられる事と推察いたします。

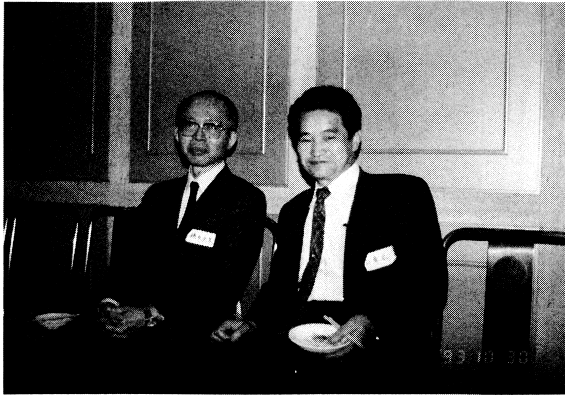
今年の一大事は在学4年生の就職が思うようにゆかなかったことです。この会誌に多忙のため原稿が間に合わなかった篠田主任教授の忙しさも前期の一大事です。みなさんのご活躍と同窓会にご関心をお寄せ下さることを期待します。

(T. I)

昨年の懇親会から









仕事に役立つ専門情報を提供する、 日経BP社

経済、機械、コンピュータ、エレクトロニクス、建築、土木、不動産、デザイン、医療、ニューサービスなどの専門情報をお届けする、「日経BP社」。31の専門誌をはじめ、ニューズレター、情報ファイル、書籍などを発行し、仕事に役立つ専門情報を提供しています。



●これらの雑誌は書店ではお求めになれません。●年間予約購読 ●直接郵送制。

日経BP社
データセンター

〒102 東京都千代田区平河町2-7-6

購読お申し込みはお電話でどうぞ。
読者サービスセンター

☎ (03)5696-1111 (月～金 9:00～17:00)

平成6年度 総会、懇親会開催のお知らせ

中央大学理工学部電気・電子工学科
同窓会々長 青木義雄

秋も深まり涼しい季節を迎え会員みなさまにおかれましては、いよいよご健勝にてご活躍のこととおよろこび申し上げます。

さて、本年度の総会、懇親会を次のように開催いたしますので、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

開催日 平成6年11月5日(土) 15時～18時
会場 南国酒家(なんごくしゅか) TEL03-3400-0031
JR山手線、原宿駅(明治神宮側出口)1分
地下鉄千代田線、明治神宮前駅(株)コクド側出口0分
会費 8,000円
平成6年学部卒業生、ご家族(同伴者)は5,000円
議事 平成5年度活動報告、懇親会
お願い お返事は、同封のハガキにより10月22日までにご投函下さるようお願い申し上げます。